

III 日本語教育と私

わたしにとって日本語教育とは何か

リク レイセイ
陸 麗青

■ はじめに

この事前レポートを書くにあたって、まず、なぜ自分が日本語教育をめざすのかその動機を明確し、その上に、「わたしにとって日本語教育とは何か」について自分の仮説を立てた。その後、仮説に基づいて、一人の日本語教師と動機内容をめぐって対話を行なった。自分の主張に相手が賛成せず、激しい意見のぶつかりの中、相手の見方に含まれている問題点のみならず、自分の不足しているところ、見えていないところも次から次へと現れた。ぼんやりとしていて、焦点がとぼけたわたしの動機も、対話を通して、もっと具体的な関心となったら最後に、その対話の内容を踏まえ、はじめの動機との関連を押さえて結論をまとめた。以下に、その仮説形成から自己変容を経て結論に至るまでのプロセスを記したい。

■ 1. 動機文

わたしが日本語教育を目指そうとしたのは、自身の学習経験とその反省によって、中国の大学の日本語教育に、新しい教育方法を導入する必要性を感じたからである。

中国の大学で日本語教育を受けてきたこの四年間を振り返ってみれば、勉強がある段階に達したら、わたしを含め、多くの学生はある「ネック」を感じる。初級のレベ

ルから積み上げてきた単語、文型及び日本語の構造などの知識は、文型の練習の場合にはうまく機能するが、いざ具体的な場面の中で使うとなると、活用できないことが多い。コミュニケーション能力の欠如を痛感したわたしは文法の本や研究書を読み、模範会話の文章を暗記し、辞書に載っている単語も順に暗記しようとして、打開策を取ろうとした。しかし、その努力と裏腹に、コミュニケーション能力は相変わらず伸び悩んでいる。

そのとき初めてあることに気づいた。わたしは日本語を多くの知識の集まりとして学んでいる。しかし、それだけではコミュニケーションの能力にならない。重要なのは、いかにすれば、その知識を実際のコミュニケーションの場で活用できる能力に変えるかという点である。

その方法を考え始めたわたしは、習った単語や文型などをその日のうちにどこかで「活用」しようとする方法を試した。ところが、日本語を話すために単語や文型を使うというより、単語や文型を使うために日本語を話している。その結果、その表現自体も堅い感じのものか、自然な日本語ではないものとなることがしばしばだった。

ここでやっと分かったのは、ずっと探していた突破口は言語知識の蓄積や再現に存在しない。知識を軸に教える活動と学ぶ活動を組織する従来の日本語教育の枠の中で、生きた日本語は身につけない。自身の体験から、日本語教育のあり方を考えるようになった。いったいどうしたら知識を実際の生活の中で活用する能力に転換することができるのかとわたしは求め続けた。

その時に出会ったのは細川先生の著作だった。わたしは「学習者主体」「言語文化総合」などの考えに触れ、コミュニケーション能力育成を目的とする、授業の組織の仕方に引かれた。中国の大学の教育の中で、コミュニケーション能力の育成に問題を感じたわたしは、自分が学んだ環境においても、その新しい理念を応用できるか。その研究と実践をしたいと思ったのはわたしが日本語教育を目指す動機だ。したがって、わたしにとって、日本語教育とは、中国の大学という環境のもとで、コミュニケーション能力を求める教室設計である。

■ 2. 対話

2.1. 対話相手について

対話の相手に決めたのは中国で日本語教育に携わっている教員で、王さんというひとだ。今は20代後半の彼は大学を卒業したあと、すぐ教壇にのぼり、初級のクラスを担当した。日本語教師暦は4年ほどだけで、大学の教師としては若手だけど、学期末の採点システムによって_81A学生から満点という高い評価をもらったこともあって、学生の間ではなかなか評判のいい先生だ。日本語教育の仕事に情熱をこめた彼と、きっと熱い議論ができると思い、自分の日本語教育に対する考えを彼にぶつけてみようと思った。

自分の立場をうまく相手に伝えることができるか。自分の主張したいことに相手ははれほど共感が持てるだろうか。もし、意見の食い違いがあれば、その質問や反論などを真正面から受け止め、相手を説得できるか。また、このインタビューを通して、自分がどのような成果を見せるか、相手にも何らかの変化が生じるか。いろいろな不安も抱きながら、多くの期待に胸を膨らませて、わたしは彼との対話を行なった。

2.2. 一回目 — 予想外の展開

対話の相手を決めたわたしは、あらかじめ、多くの設問を用意し、一回目の対話に望んだ。準備した設問に、例ば次のものがあった。

1. 動機文をご覧になって、ご感想はいかがですか。
2. 王さんは日本語を勉強しているうちに同じ問題を感じましたか。
3. 今教える立場にたって、その問題の解決方法を考えたことがあるのでしょうか。日本語のクラスで具体的にどのような対策を採っているのですか。知識の伝授と能力の育成とのバランスについてどう考えているのですか。
4. 学習者は王さんの今までの授業に対するフィードバックと評価はいかがですか。ご自身の授業をどのように改善したいですか。

5. ほかの先生と一緒にこのような問題について討論とか行なうことがありますか。みんなから関心は寄せられていますか。

しかし、わたしが動機文で取り上げた「ネック」という現象について、王さんは次のように述べた。

そうですね。それは一つの段階だと思います。しゃべれないのは、日本語の単語や文型などの知識がまだ足りないでしょう。いったんその知識をある程度積み上げたら、自然に相手とすらすらと交流できるようになるとわたしは思います。また、もう一つの原因はおそらく一部の学習者の性格にあるだろうと思います。

さらに、王さんは自分が行なっている日本語教育がコミュニケーション能力の育成の面で問題がないと断言した。彼の教育方法で学習者がコミュニケーション能力を身につけることができると述べた。わたしの動機文の前提は彼に否定された。自分の予想とまったく違う展開で、前もって準備したものは全部役立たなくなった。そのとき、わたしは対話の進む方向を見失ってしまった。その後の対話も局面を開くことができなくて、こうして、一回目の対話は失敗に終わった。

2.3. 二回目 — 王さんの授業について

王さんの授業はどんなものか？本当に王さんの言ったとおり、コミュニケーション能力の養成の面で問題がないのか？二回目の対話は王さんの授業の仕方について聞くことにした。

次は、その授業の枠組みである。王さんは、まず、教科書の単語の朗読と意味の説明から始まる。次は本文を読みながら、新出の文型、文法を黒板に書き、例文を挙げて説明する。新出の文型、文法の練習として、日本語と中国語の対訳を取ったり、ある場面を設定して、対話を組織したりする。最後はもう一回本文を読み直して、学習者が理解できたかどうかを確認するという流れだった。教材を中心とする授業のよくあるパターンである。そのような形式でどうして学習者からいい評判が得られるのか。疑問を感じたわたしは王さんに教案を見せてもらいながら、酒6業の内容をさらに

詳しく説明してもらった。

その教案と後の対話の中で、王さんの努力の跡が見えてきた。その分厚い教案は、王さんは授業の準備にどれほど多くの時間をかけたかを物語っている。より分かりやすく、より楽しく、より効率的に授業を運ぶために、王さんは授業以外の時間のすべてをその準備に当てるといふ。

その努力という、例えば、新出の単語や文型を説明するために、教科書に載っている例文を使わずに、中国で市販されているすべての辞書や参考書、また、日本の新聞の記事や小説をダウンロードして作ったデータベースから例文を集め、その中から一番いいものを選んだりしている。また、中国にも出回っている教科書の教案やマニュアル的なもの、及び彼自身が大学時代の先生のメモなどについては、参考はしているものの、必ず彼自身の努力で、もっといい教案を考案して授業をするようにしているという。本人の言ったことばで、教科書のまま、マニュアルのままの授業をせずに、自分の授業を作り出すことに一種の達成感を感じている。

そのほか、王さんは、自分の授業でいくつかの小さな工夫も凝らしている。その中、次の二つはわたしにとって結構興味深い。

一つは王さんがその授業に五分間の朝スピーチの時間を設けたことである。半年の勉強を終えてから導入したもので、テーマは学生に自由に選ばせて、授業の最初にクラス全員の前で発表してもらっている。王さんはこのスピーチを設けると、教室の雰囲気は変わり、学生が日本語で表現することを通して、授業の効果も確認できると紹介した。しかし、朝スピーチをめぐる先生と学生あるいは学生同士の間にディスカッションしたりすることは行なわれていないと王さんの話を通して分かった。名前どおりの「五分間の朝スピーチ」だけとなった。

もう一つの工夫は日本のことや文化についての紹介である。王さんは単なることばの勉強は学習者にとって、乾燥無味のものだと気づき、単語の説明と文型の練習の繰り返しだけでは、学習者がすぐ飽きてしまうと話した。それを避けるため、王さんは学習者が強い関心をしている日本についての紹介を彼の授業に入れた。毎回の教案の

不可欠の項目となったほどである。その一部を見せてもらった、たとえば、単語の「梅干」「納豆」を教えるとき、日本物産の店でそれらを購入し、学習者に味わってもらったり、「…以上(は)」の文型の説明したり、「力士になった上、横綱は夢。(貴ノ浪)」のような例文を選択したり、「(いくら)する」と言う文型の練習で、日本の新聞から卸業者の野菜や魚の値段を調べてきて、それに基づいた日中の対訳をしたりするなど、ことばの勉強に日本の物事、事柄を織り込もうという努力をしている。また、直接授業の内容と関わりのあるものを見つからなくても、冠婚葬祭のマナーや文学、歴史などの日本についての話を必ず一つ用意して授業で紹介する。それを通して、授業での学習者の集中力を高めることができたと同時に、学習者が日本語の勉強に対する興味も維持できたと王さんは述べた。

二回目の対話で、王さんの授業の全貌が浮かんできた。彼が日本語教育に込めた情熱と自分の仕事に対する誇りが伝わってきた。それと同時に、わたしの日本語教育に対する見方で、王さんの授業の仕方をもう一度見てみると、いくつかの問題点も感じた。

王さんは、単純なことばの勉強の無味乾燥さと学習者が日本の事柄に示した高い関心を察知した。彼が「日本文化」を取り入れようとする一番の目的は授業の面白みを増すことにある。王さんの授業では、「日本文化」は先生が予め考案した例文や練習、あるいは知識の形式を学習者に提供することにとどまり、それを学生の日本語でのコミュニケーション能力の育成に結びつけるまでには踏み込んでいない。王さんは、学習者が日本語で自分の考えを表現する意欲に気づき、学生にそれぞれ言いたいことをしゃべらせるチャンスを与えた。しかし、その形式も、ただ語学の旅の一つのオアシス的な存在として捉え、学習者のコミュニケーション能力の練習の場に活用できなかった。王さんは授業に新たなものを生み出すことを一つの目標にしているように見える。しかし、対話の中で感じたのは、従来受けた教育の方法、マニュアル的な教案は彼にとって一つの限界となった。彼は従来の方法を受け継いで、その枠の中で努力し、改良を図っているだけである。その何箇所かの改善に満足した彼は、自分の方法は

本当に学習者のコミュニケーション能力に繋げだかどうかについてまったく注目していない。

王さんについての観察を通して、教育方法の慣性的な受け継がれ方が見られる。つまり、教育者の創造力は自身が受けた教育、また、その教育者を支えるネットワークに制限されていると言えよう。その教育の枠の中で、教育者が追求しようとしているのは、外的な知識、考える技術などである。学習者の中のコミュニケーション能力の養成に目をつぶってしまう嫌いがある。結果としては学習者のコミュニケーション能力は保障できない。あれだけ時間をかけて、じっくり王さんの教育方法をうかがったが、その教育方法の中で、どれが学習者のコミュニケーション能力に結びつけるかについて、まったく見えていない。王さんの言う「コミュニケーション能力の養成に問題がない」ということばは、残念ながら説得力が感じられない。次回の対話の中で、今回気づいたところと、わたしの考えている日本語教育を王さんにぶつけて、その対応見てみることにした。

2.4. 三回目 ― わたしの目指している日本語教育

二回目の対話を通して、王さんの授業の全貌を明らかにした。それはまさにわたしが受けてきた日本語教育そのものである。王さんは従来の知識伝授の教育の枠にとらわれ、その関心と努力はただ知識を伝授する方法の工夫に走り、せっかく気づいた学習者の関心を持っている内容と学習者の表現意欲も、コミュニケーションの養成に活用できなかった。わたしは、その原因は、従来の教育の強い影響と、王さんがまだ学習者たちの表現活動を組織したり、支援したりする方法を心得ていないことにあると思った。三回目の対話の中で、王さんの問題を本人に指摘すると同時に、具体的な組織の形式、教室の設計をもって、わたしが動機文に述べたコミュニケーション能力の育成のための日本語教育を王さんに示すことにした。

まず、王さんにその授業の問題点を率直に打ち明けた。王さんの教案はいかに知識をコミュニケーション能力に変えるのかに対して具体的な支援計画を持っていないと

わたしは指摘した。

そして、わたしは自分が目指しているコミュニケーション能力の育成のための日本語教育について詳しく説明した。わたしは王さんのクラスの中で行なわれた朝スピーチの形式を取り上げて、次のような朝スピーチの組織の形式を勧めた。学習者にそれぞれテーマを探らせて授業中に発表してもらうまでは王さんと同じだ。しかし、そのスピーチを聞いた学生は聞き流すだけにとどまればそれまでのことだ。スピーチを聞いた学生に質問をする時間を与える必要がある。発表者はさらにその質問に答えるという形を取れば、教室のやり取りを活発させることが出来るとわたしは王さんに説明した。スピーチの内容や構成などについて具体的なコメント、意見の交換を通して、発表者は、自分の考えていることを発信し、ほかの学生からの質問を理解したうえで、自分はどのように受け止め、いかに対応するのか、そういうことに直面しなければならない。一方、スピーチを聞く学生のほうも、そのスピーチの内容を理解したうえでそれについて自分の考えていることを相手に示し、疑問を投げかけ、コメントを与えることは要求される。そういう活動を行なうと、学生の日本語による思考及び自己発信能力はしだいに培われ、実際に学習した日本語知識を活用する能力も高められると王さんに説明した。

また、王さんはただ授業を面白くする内容としている日本の社会や文化について、わたしは自分の目指している日本語教育においては、それをコミュニケーション能力の養成に活用できると王さんに伝えた。学習者が興味のある話題を日本語の勉強と結んで教室の活動を活性化するのはもっと意味があると自分の考えを示した。わたしは王さんに提案した。学習者の考えていることを大切に、それをめぐってさまざまな形式の活動を開発する。たとえば、学生に興味のある話題を引き出してそれに関する情報、自分の考えを用意してもらい、それをクラスに持ち帰り、教室ので皆さんの前で発表し、学生をグループに分けさらにディスカッションやディベートを行なう。最後には、その成果をまとめ、冊子か報告書を作成する。こういう活動を通して学習者は話題についての認識を深めるだけでなく、日本語の「話・聞・書・読」の四技能

も鍛えられるとわたしは王さんに説明した。

わたしはさらに、王さんに自分が目指している新型の日本語教育の特徴をまとめた。日本語のコミュニケーション能力を育てることをその中心にすえ、具体的な活動の中で日本語を体得していく方法である。無機的なことばの練習を繰り返すのではなく、学習者一人一人が実際に考えていることをお互いに伝え合う活動によって日本語を身につけるということを求めている。担当者はこういう活動を組織し、支援する役割を担うことになる。

2.5. 王さんの疑問

王さんはわたしの主張を聞いて、しばらく考え込んだあと、わたしの目指そうとしている教育についてある程度分かってきたという。王さんは、自分の授業の中でも、このような組織方法を試してみたいと話した。しかし、ただ従来の教育方法の一つの補足的な手段として捉えていて、それに基づいて日本語教育を建て直すのを躊躇しているようだ。そのわけを尋ねてみると、王さんが抱いている疑問と不安が一連の質問となって、わたしに投げかけてきた。

1. 学習者がどれほど積極的に参加できるか。一部の学習者が積極的に参加しても、残りの内気的な学習者が平等に練習のチャンスが得られるかどうかの問題です。
2. その練習で、教師が言語知識の支援として出した単語や文型などはどれほど学習者のものになれるか。外国語の勉強の最初の段階に、単語の勉強は学習者にとって決して容易なことではありません、七回繰り返されて初めて覚えられるとも言われる。陸さんの方法で勉強したものはどれほど印象に残れるか、ただ聞くそばから忘れてしまう可能性がないでしょうか。
3. 言語知識の体系をどうやってたもてるか。学習者の関心を持つ内容は、その世代の興味をもつ話題に集中したら、会話の中に出た単語や、文型にも偏りが生じる、必ずしも広範囲をカバーできる言語知識の習得につながる事が保証できない。
4. 学習者主体の授業で、進み具合がどうやって把握するか。一定の期間で

どれほど上達するかについて計画性を持たなければならないところ、たとえば大学の教育は、陸さんのいう方法に任せることができるか？

5. 学習の方法はある意味でひとつの文化であり、学習者が新しい学習の文化に適應できる保証があるか。

王さんのこの連発の質問にわたしはうまく答えなかった。理想を語るだけで相手を納得させることが不可能であるとも分かった。今のわたしではこれ以上対話を続けても、何らかの成果を結ぶことがないだろう。わたしはこれで王さんとの対話にピリオドを打った。

2.6. わたしの気づき

王さんとの会話は最初設定した目標を達成できずに終わってしまった。しかし、最初の目標を見失ったわたしは、はじめに気づいていなかったなにかも見えてきた。わたしは、学習者主体の総合の日本語教育について、多少知っているつもりだった。しかし、今になって、わたしは学習者主体の総合の日本語教育の基本について、まだ無知に近い状態だと分かった。学習者はその教育の中で、いかにコミュニケーション能力を獲得していくのか。それを明らかにするのはわたしにとって当面の一番基本かつ重要な課題である。

動機文の段階で、先輩から「足元を固める」というコメントをいただきました。今になって、改めてその必要性を感じたのである。総合の日本語の授業に加わり、教室活動を研究のデータとしてとり、それに基づいて分析を行って、総合の教室活動のなかで、学習者が自分のことばを獲得していくメカニズムを研究するのは、今のわたしが一番したいことである。

わたしは、王さんが知識伝授のテクニックばかり着目していて学習者の内面のコミュニケーションの育成にまったく着目していないと批判した。しかし、考えてみれば、わたしも彼と同じではなかろうか。「総合」やら「コミュニケーション」やら、旗を掲げていて、しかし、実際には「中国の大学の日本語科」という学習者を取り巻く環境しか視野に入れていない。ことばは学習者のそとに存在せず、学習者の内にあ

るという総合の原点を忘れてしまったのである。今回の対話はこの重要なことを気づかせてくれたのである。

■ 3. 結論

3.1. 最初の動機文はどのようなものか

当初の動機文はこのようなものだ。わたしは日本語を勉強してから、その経験と反省から、今まで受けた教育と違った新しい方法を導入する必要があると考えるようになった。四年間の勉強を通して日本語の知識を積み上げてきたが、実際の場面の中で自由かつ確に日本語を活用して、自らの意志を示し、相手の話を正しく理解する能力はまだ不十分だと感じた。どのようにすれば、学んだ知識を活用する能力に変えるのかということにわたしは行き詰っていた。すると、自分の経験から日本語教育のあり方を再考するようになった。従来のような教育のもとで、コミュニケーション能力の育成は十分重視されていないのは現状だ。よりよいコミュニケーション能力の育成方法を求めているわたしは「学習者主体」の「総合の日本語教育」に出会った。中国の大学の日本語教育にこういう斬新な理念を導入して、いかに学びの環境を整え、教室活動を組織するのかがわたしが日本語教育をめざす動機になった。

3.2. 対話とわたしの気づき

中国の大学の日本語科という環境における学習者主体の総合の日本語教育の応用を自分の当面の課題としたわたしは、今回、一人の日本語教師、王さんと対話に入った。しかし、相手を説得するどころか、彼を自分の議論の軌道に乗せることすらできなかった。方向転換を余儀なくされたわたしは王さんの授業について伺い、そこから突破口を見つけようとした。対話を通して彼の授業の中心は日本語の知識を教えることだと分かっているが、総合の日本語教育の、コミュニケーション能力の養成の面での優位性について、説得力をもって示すことはできなかった。そのとき初めてあるこ

とに気づいた。わたしはうわべの、形だけの学習者中心の総合の日本語教育で満足した。自分が否定しようとした王さんと同じ、学習者の中のコミュニケーション能力そのものから目をそむけてしまったのである。

3.3. 新しい関心と日本語教育についての認識の変容

中国の大学の日本語教育に、新しい教育方法を導入することを目指しているわたしの動機は、ここになって、もっと具体的な関心ごととなった。それは総合の授業の中で、学習者のコミュニケーション能力はどのように培われたかという課題である。それはわたしが目指そうとしている教育の原点であるということ、今回の対話を通して分かってきたからである。ここでわたしはもう一度自分に「日本語教育とはなにか」を問い直した。もう、動機文の「中国の大学という環境のもとで、コミュニケーション能力を求める教室設計である。」からだいぶ変容をとげた。わたしにとって、日本語教育とは学習者の中にあることばの獲得の観察と分析に基づいた教育形式の組織である。

■ 4. 感想

夏休みの間にこの事前レポートを作成して充実した日々を過ごしてきた。正直に言えば、新学期がまだ始まっていないのに、もうレポートという形の宿題が出されて最初にちょっとびっくりした。と同時に、さすがに大学院の勉強が違うと納得した。この事前レポートはこれから二年間の大学院生活のウォーミングアップになると考えて、取り組んでみた。

こういう風にレポートを書くのは初めてだった。「わたしにとって日本語教育とは何か」というテーマは決してまとめやすいものではない。宿題の指示に従い、まず「なぜわたしは日本語教育をめざすか」という動機文のまとめから出発した。自分の中のなぜをもう一回見つめ直すことによって、まだ明確させるほどには至らなかったが、

自分の日本語教育に対する考えを前よりだいぶ掴んできた。動機文に書いた自分の考えはまだ未熟な部分が多く、しかしながら、このように自分の立場を明らかにすることによって、ほかの人に提示する準備ができた。こうして自分の考えを発信する第一歩を踏み出すことができた。

メーリングリストに動機文を提出して、研究室の先輩方から数多くの丁寧なコメントをいただいた。そのアドバイスは適切で、役立つものばかりだった。それによって、わたしの動機文にある問題点や不足なところなども徐々に見えてきた。先輩たちがあれだけ丁寧にわたしの動機文を読んでくださって、ことばでは言い表せない感動で一杯になりました。鵜呑みせずにコメントをよく消化して自分の文章に取り入れようと一生懸命頑張った。コメントをもらい、それを理解し、返事し、コメントをもとに文章を直すというプロセスを経て、自分なりの動機文を修正できた。今回初めてのメール交換を通して、わたしはメーリングリストでのインターアクションを体験し、それについてますます興味が高まった。九月から、先輩方及びクラスメートの皆様との白熱した議論や活発なインターアクションを待ち望んでいる。

その後、第二の段階にはいり、この段階では今まで経験したことのない対話ができただ。自分の主張を相手にうまく伝えられたか。相手からの質問や反論などを受け止め、どのようにすれば自分の考えを説得力を持って示すことができるか、いろいろな試練が待ち受けていて、対話の難しさをしみじみと感じた。それと同時に、対話を通して、自分の動機を客観視することができた。それは最後の結論を導きだすのに大いに役に立った。一連の新しい気づきは、相手とのインタアクションを抜きにしては語れないというのはわたしの実感である。対話の真意はそこにあるのではなからうか。この対話を踏まえながら、結論を書いた。

もちろん、このレポートを書き始めから仕上げるまで、すごく悩んだり、落ち込んだり、前の方向はわからなくなったりすることはしばしばある。その大変さを味わってこれからの勉強についての心構えができた。先輩からのメールに書かれたように、大学院の勉強は体力と脳みそを絞って頑張る力は必要だと覚悟して一層頑張りたいと決心した。